

茶会あれこれ

雅松庵茶会より



京都府木津川市の関西文化学術研究都市に位置し、その中核を担って注目を集める国際高等研究所を会場に、6月6日、恒例の「雅松庵」茶会が行われた。

本茶会は今回で十回目を迎え、本間宗寿氏の担当で茶室・雅松庵の広間に薄茶席、セミナーラウンジに立礼席が設けられた。応募による一般客に加え、尾池和夫同研究所所長をはじめ木津川市長、精

華町長ほか招待客、京都府下・奈良県下の高等学校茶道部の部員らおよそ三百名の喫客が参席した。

「雅松庵は、世界中から訪れる学者、文化人をもてなすために贈雲斎大宗匠より寄贈され、平成5年に茶席披きが行われたもの。庭園も茶室の一部と考えて、広間客席側の障子が全て戸袋に収納できるという工夫により、広間と庭が一体となった空間が構成されている。快晴となった当日は、前日の雨で深みを増した鮮やかな芝生の緑が席中より臨まれた。

このような情趣の中設けられた薄茶席の趣向は、「夏の訪れ」。床には、初夏の花々が入れられた鶴籠花入、芦に水文香合が荘られる。茶約は坐忘斎家元の作で、銘は六月の異称でもある「林鐘」。また柴付の菓子鉢に盛り込まれた葛饅頭・銘「草の露」は、箔に混ぜ込まれた一休寺納豆が蟹に見立てられ、目にも涼しげ。喫客は、席主

【左】鶴籠花入。初夏の風物詩として知られる鶴籠の情景と、川のせせらぎが連想される



【左】芦と水文が意匠された平丸香合



【上】点前座。水指は、竹絵の菓子鉢に塗蓋を合わせたもの。庭の緑が映ったかのような風炉先の青楓絵が爽やかな



【上左】淡々斎好の瑩籠炭斗を菖盆に。緑色の紗が涼感を誘う
【上右】瑩に因んだ緑色の葛饅頭は「草の露」と銘される



【上】席主・本間氏の挨拶。正客に尾池所長を迎えて
【左】爽涼とした道具組みから「夏の訪れ」を感じ取る喫客

との会話や道具組みを堪能しつつ、心尽くしの一皿を喫していた。

また、セミナーラウンジに傘を立てて野点の風情が醸された立礼席には、時雨傘花入や、水辺に遊ぶ姿の涼やかさから夏の季語となっている翡翠の絵の長葎などが取り合わされた。さらに同ラウンジにはお点前体験コーナーも設けられ、参加者は手解きを受けつつ帛紗捌きや盆略点前を体験。親子で挑戦する姿も見られ、梅雨入り前の爽やかな気候となったこの日、喫客は楽しみながら茶の湯に親しんだ。

■茶会記

本間宗寿氏

薄茶席

待合床 西山芳園筆 水草に螢図

本席(雅松庵)

床 鵬雲斎大宗匠筆 雲悠々水

花 破傘 菖蒲 山紫陽花 螢

花入 鶴籠

香合 芦に水文 平丸 鵬雲斎大

宗匠在判箱

風炉先 青楓絵

釜 一燈好 蒲団 今日庵字、

花押鈔込

風炉 土面取道安 常什
 長板 真塗
 水指 竹絵鉢 淡々斎箱 半七造
 薄器 山水絵大棗 鵬雲斎大宗匠
 箱 一兆造
 茶杓 坐忘斎家元作 銘林鐘
 茶碗 黒緑袖掛分 銘五十鈴川
 淡々斎箱 弘入造
 替萩 銘音津連 淡々斎箱
 替色絵卵の花 淡々斎箱 正全造
 蓋置 松葉蒔絵竹 秀斎造
 建水 朝日 茶摘籠形 豊斎造
 菓子 草の露 寿庵庵製
 器 染付
 眞盆 淡々斎好 蓋籠
 火入 累座水草文 千弥造
 立礼席セミナールウンシ
 床 鵬雲斎大宗匠筆短冊 千里
 万里同風
 花 京鹿子 撫子
 花入 淡々斎好 時雨傘
 棚 淡々斎好 御園棚 常什
 釜 霰真形 常什 政光造

水指 壺 チェンマイ製
 薄器 溜翡翠絵長棗 誠志造
 茶杓 淡々斎作 銘笹舟
 茶碗 鵬雲斎大宗匠手捏箱 銘香
 風 覚入焼 香斎造
 替 撫子絵 臥牛造
 蓋置 現川焼 鷲絵 臥牛造
 建水 竹 内朱 寿庵庵製
 菓子 草の露
 器 鍋島青磁
 眞盆 一位細工 手付
 ■席主より—
 雅松庵茶会は平成11年11月に購



【上二点】正座に慣れていない方にも楽しんでいただきたいと設けられた立礼席。親子で一碗を楽しむ姿も

雲斎大宗匠がけいはんなプラザで御講演の折、添釜を懸けさせて頂きました時に始まります。
 第二回目は、平成13年6月、「二十一世紀の茶道」と題して故伊住宗匠が御講演、雅松庵のたたずまいを殊の外にお喜びでした。
 それから毎年、今年で十回目です。このたび、4月より御着任の尾池和夫新所長を二席目の正客にお迎えして新しい十年が始まりました。社中共々この灯を守って参りたく思います。



大盛況のお点前体験コーナー



子ども達も益略点前に挑戦